

### シリーズ「乳がん」③

## 「乳がんの薬物治療」

独立行政法人国立病院機構和歌山病院

薬剤部 小野 泰明

乳がんの薬物療法に量は減らす薬と、乳がんは、「ホルモン療法」、「化学療法」、「分子標的薬」の3つがあります。

これらの治療法は手術前、手術後、遠隔転移(他臓器に転移している場合)の全身治療で用いられます。再発や転移の予防、手術が困難な進行乳がんや、しこりが大きくなって乳房温存手術が困難な乳がんで、がんを縮小させ手術を可能にする目的で手術前の薬物療法は行われます。また、手術後の薬物療法はどこかに潜んでいる可能性のある微小転移の根絶を目的として行われます。遠隔転移や再発の場合には、がん細胞の根絶は困難なため、進行を抑えて延命効果を得ることも、症状緩和を目的として行われます。

乳がんには、体内の女性ホルモン(エストロゲン)の影響でがん細胞の増殖が活発になる性質(エストロゲン、プロゲステロン受容体陽性)のものがあります。ホルモン療法はこれらを対象としており、乳がん患者さんの約70〜80%に使用できます。ホルモン療法では体内でエストロゲンの

よって有効な予防法や対処法があるものもあります。

分子標的薬はがん細胞に特異に発現している分子を狙い撃ちにすることで、より効果的に副作用を少なく、がんを抑える効果が期待された治療法です。乳がん細胞の中には、その細胞表面に「HER2タンパク」をもっている(HER2陽性)ものがあります。乳がんにおける代表的な分子標的薬にはトラスツマブ、ペルツスマブ、ラパチニブなどがあり、これらはHER2タンパクを攻撃することでがんを抑えます。乳がん患者さんの約15〜20%でHER2陽性で、HER2タンパクを持っているがん細胞にのみ効果を発揮します。他にも抗VEGF抗体薬、mTOR阻害剤、CDK4/6阻害剤といった分子標的薬もあります。

化学療法では、複数の薬を同時にまたは順番に使うのが一般的です。その理由としては、作用の異なる薬をいくつか用いることでがん細胞をより効果的に攻撃できるためです。抗がん剤は、がん細胞に作用して、増殖を抑え、死滅させます。しかし、正常な細胞にも影響を与えるため、化学療法を行うと、吐き気、脱毛、白血球減少など様々な副作用を起す可能性があります。症状に期待したいところです。